特定非営利活動法人 ドクターMAYA 人道基金
2022年 ニュースレター
http://dr-maya.net/

＜2022　初夏＞

薄手の布手袋の上にゴム手袋をはめ、気密性の高い医療用マスクに交換、フェイスシールドを少し顔面から隙間のある全顔面カバータイプに変更、　白衣も男性医師用の長い白衣を選ぶ。　診察室では防御服は避け、室内の物品を最小限に留め、医師―患者の距離を保ちながら　診察中の病人のストレスを緩和する。
消毒薬に痛められた手指が最近ようやく回復傾向にある。
重装備と絶え間ない緊張感が自身の体力を低下させ、パンデミック 2 年目の冬に、同居のセラピードッグ・ボブがダウンした。　しんしんと冷え込む時期に、後ろ足が動かなくなり、3 本足歩行になった。　動物の看病と　自身の体調管理を続けながら、春を待ち侘びて　診療を強行した。
同級生が優雅な年金生活に移行している時期に　ウイルス感染の最前線で診療を続けることの無謀さを感じないわけではない。
しかし、用が無くても　私が診察しているか案じて　覗きに来る人達がいる。
遠距離通院の患者さん達からの電話も　心配してくれている事が感じられる。

私が生まれた年に結核予防法が成立していた事を知ったのは　成人して医師になってからであった。
私の出生と時期を同じくして喀血した父は　一度も医師の診察を受けられず、永年働いていたアメリカの教え子たちから　当時日本では手に入らない抗結核薬ストレプトマイシンを直接送ってもらい、　無資格の母に　病人の父が指導して、この薬を自宅で注射するという、生活であった。
父は第二次世界大戦を敵国アメリカの抑留所で過ごすという悲惨な経験をして、体力低下し　結核蔓延下の祖国に送還されて発症したのであった。
しかし、不幸中の幸いで、当時アメリカの敵国であったドイツ人・イタリア人の知識階層と同じ場所に抑留される事もあった父は、この抑留所でドイツ人医師達から医学の手ほどきを受けたという事であった。
私が小学校低学年の時期まで、我が家は消毒薬の臭いで満ちていた。

幼い従妹が誤って乳白色のクレゾール液に顔を近づけ、「飲んだかもしれない」と、大騒ぎになった事件もあった。

今日も通院中の５人家族の３人がコロナ感染したと連絡が入り、コロナウイルス感染症のパンデミックの騒動は未だ鎮まってはいない。

ボブは温風下の背椎マッサージを喜び良く効いている、ケージの敷物も純綿製で退屈しのぎにかじっても安全な物を何度も作り替え日乾しを欠かさず、脚の神経障害の元凶・腰回りの保温にスタッフの綿セーターを作り替え、室内自由時間を増やし、病状と気候に合わせて漢方薬を調合、匂い消しと栄養補給を兼ねてチキンスープを混ぜたエサに薬を入れる。　多くの人々の愛とメリーの励ましを得て、冬中ボブは懸命に奮闘し、今春　奇跡のカンバックをはたし、４本足で走れるようになりました。　まだまだ落ちてしまった脚の筋肉回復には時間がかかるでしょうが、危機を脱したボブと激励のメリーは爽やかな初夏を楽しんでいます。
快気祝いはメリーと一緒に念願の公園散歩になりました。

父が完全に仕事復帰するまでには 10 年以上かかりました。　その間は在宅療養で、咳が止まってからは　我々子供たちと過ごす時間がたっぷりありました。自分が走れない身体なので、白い雑種犬ペスを連れて裏の田んぼ道に出かけ　私を先に走らせて　はやるペスを抑え　後から離す　という訓練を私に受けさせました。　ペスは使命感に燃え　何度も何度もこの練習を繰り返し、ぐずな私をいっぱしのランニング選手に鍛え上げました。　隣村の小柄で素晴らしい走り手の同級生に勝って選手に選ばれた時は　ペスの特訓に心から感謝したものです。

動物にも人間にも　過酷な時期が続きます。　お互いに支え合い励まし合って生き延びる日々は、　今日一日　スタッフ一同が無事で　ささやかな社会奉仕の出来る事が有り難く、皆様の健康を念じつつ　ご支援にお礼申し上げます。

NPO 法人ドクターMAYA 人道基金

http://dr-maya.net/